

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

羊は草、魚は水——山元清多のつもんゴる話 2

おたより ひらのさくら 20

詩三篇 13

うごく日本語 志沢小夜子 21

野うさぎと死 ウィネバゴ説話

水牛かたより情報 23

私たちだけ アリス・ウォーカー

料理がすべて 田川律 24

リズの胸に輝くダイヤモンド アリス・ウォーカー

「カフカ」ノート 高橋悠治 28

キリコのコリクツ 玖保キリコ 17

走る・その八 デイヴィッド・グッドマン 30

羊は草、魚は水—— 山元清多のつもんゴる話

九月三日の夜、新宿文化会館でブレヒトのソングをきく会があった。林光、斉藤晴彦、稲葉良子、萩京子さんの出演。今年はブレヒトが死んで三十年目にあたるそうだ。ちなみにロルカが殺されてから五十年目——そこで加藤直作詞・林光作曲の「ロルカさんとブレヒトさん」という歌を、林さんと斉藤さんが歌った。

コンサートのあと、つめたくなったおでんをつつきながら、三日まえモンゴルから戻ったばかりの「ゲンさん」こと山元清多の話をきく。聞き手は平野甲賀と田川律。リッさんも昨日までタイにいらしていた。途中から佐藤信と津野海太郎が話にくわわる。「で、ゲンさん、どのくらい向こうに行ってたの?」

ゲン——七月三十一日に行って、八月三十一日に帰ってきたから、ちょうど

ひと月。モンゴル人民共和国ね。そこにテレビのドキュメンタリーをとりに行ったの。

一九二二年だったかな、あそこはソ連のつぎに社会主義国になったわけ。政治的にはソ連にちかいんだけど、いまも中ソのあいだにはさまれて、微妙な関係にあるのね。それで中国からモンゴルには飛行機でなく汽車で行くしかない。北京で汽車にのって、三十時間かかってウランバートルにつく。そこからさらに二十時間ぐらいジープにのって、モンゴル中央部にあるアルハンガイ地方という山岳地帯——そのパリヤットという小さな共同体に行っ

て、そこでやっかいになってたの。リッ——そこが本拠地? ゲン——うん。それで、その周辺の自然をテレビでとってまわった。ヒラノ——あたりに海は…… ゲン——ない。モンゴル自体に海がないから。いってみれば、草原が海みたいなものなんだね。ただ、ぼくらがイメージするような、ほそい草が密集してはえているような草原じゃなくて、根のふかい草が半乾燥地にしがみつくようにして、みじかくはえてる。地平線までまっ平らな草原が、山岳地帯にちかづくにつれて、波みたいになうねりはじめて、峠をこえると草原、峠をこえるとまた草原というふうには、いつまでもつづいていくのね。樹木は一本もはえていない。

ヒラノ——でも、一年中、草がはえてるわけじゃないんだろ? ゲン——冬になると、雪におおわれる。十月ぐらいいから雪がふる。ヒラノ——じゃ、魚がいるところは川とか湖とか? ゲン——そうね。山岳部にいくとカラ松なんかの針葉木がはえてて、そこに降った雪や雨が川や湖や湿地帯をつく

リッ——そこが本拠地? ゲン——うん。それで、その周辺の自然をテレビでとってまわった。ヒラノ——あたりに海は…… ゲン——ない。モンゴル自体に海がない

から。いってみれば、草原が海みたいなものなんだね。ただ、ぼくらがイメージするような、ほそい草が密集してはえているような草原じゃなくて、根のふかい草が半乾燥地にしがみつくようにして、みじかくはえてる。地平線までまっ平らな草原が、山岳地帯にちかづくにつれて、波みたいになうねりはじめて、峠をこえると草原、峠をこえるとまた草原というふうには、いつまでもつづいていくのね。樹木は一本もはえていない。

ヒラノ——いま季節は……? ゲン——夏の終わりですね。いちばんいい季節。ぼくらが行ったすくるときはものすごい緑だった草が、帰ってくるときには褐色に変わって、山に雪が降りはじめた。だから、ぼくらの感覚でいうと、夏の終わりから秋の終わりまでの時期が、たった一か月で終わっちゃう。ヒラノ——はあ。

ゲン——畑がまったくなく、木がぜんぜんないというのが、最初のおどろきだったね。そういうところで遊牧生活をしている。

リツ——いわゆる「包」ね。

ゲン——そう。モンゴル語で「ゲル」っていうんだけど、白い天幕をはって、基本的には春夏秋冬と場所を変えながら、家畜をつれて移動している。あそこはいま遊牧でなりたっている唯一の国なんだってね。

リツ——でも、都市部はそうじゃないんでしょ？

ゲン——いや、モンゴル全部がそうなの。都市もちょっと郊外にいけば、そこから草原がはじまっている。で、遊牧民は二か月も三か月もかかって、地方から家畜に草をはませて太らせながら、首都のウランバートルまではこんでくるわけですよ。カウボーイみたいに馬で追いつながら。そして、その肉の供

給公社かなんかで食肉にする。だから首都までずっと家畜に食わせる草がたっぷりいなくちゃならない。

リツ——ウランバートルって、どのくらい人口があるの？

ゲン——四〇万くらい。モンゴル全部の人口が一八〇万か九〇万だから、だいたい四分の一が首都にあつまってる。第三世界の都市集中度とちょうどおなじくらい。

リツ——そして、そこからずっと南にさがったら、わたしの行ってたタイになるんとかうの？

ゲン——そうそう。モンゴルの草原からシルクロードのあるゴビ砂漠をはさんで、その向うにヒマラヤがあって、その向うに東南アジアの亜熱帯の国々がある。

リツ——そうすると、タイからまっすぐ北に行って、ゴビの砂漠をこえれば、そこにゲンさんがいたわけだ。

ゲン——田川さんは、どれだけタイに行ってたの？

リツ——ぼくはホンのちょびつとよ。

八月二十三日に行つて九月一日まで、バンコク東南のラヨンというところから船で四十分くらいの、コサメというリゾートの島にいたの。「コ」というのは「島」という意味。だからサメ島だね。カラワン楽団のモンコンさんにすっかり世話してもらつて、ただ海辺でぼーっとしてた。

ゲン——よろしな。

リツ——へっへっへ。タイは年中暑い。いちばん寒いのが十月から一月までなんだけど、それでも二十六、七度はあるらしいよ。北と南、草原と海——全然ちがうね。

ゲン——モンゴルは年間の平均気温が二度くらい。

ここで佐藤と津野が参加。

ヒラノ——巨大魚なんだろう？

ゲン——そうなの。アマゾンの魚をのぞけば、世界中でもっとも巨大になるといわれている。大きいのだとニメートルちかくなるんだってさ。

マコト——ふっふっふ、カイちゃんよりでかい。

ゲン——ところが、ダニューブ系っていう北ヨーロッパのものとか、ソ連や中国の北のほうとか、世界で四種類か五種類のイトウがいるんだけど、どこのも型が小さくなって、なかなか釣れなくなってるのね。つまり川が開発されるにつれて、どんどん小さくなってしまふ魚なの。

ヒラノ——保護はされてないの？

ゲン——ヨーロッパの一部では産卵させて飼育して放流してるらしいんだけど、放流する川自体が汚染されてきてるからダメらしいですね。大きくならないらしい。ただ、モンゴルだけには

まだ巨大なイトウがいるらしいという噂があつて……

マコト——噂だけでモンゴルまで行ってちゃうんだから、テレビってのはおそろしいな。

ゲン——噂だけじゃなく、確実な調査もあつたんだよ。

ツノ——あつはつは、テレビ局を代表して弁解してるな。

ゲン——それが異常気象でさ、平野さんも釣り好きだからよくわかるだろうと思うけど、水温とか水量が変化すると魚っていうのは完全に変わっちゃうんだよ。餌を追わなくなるとか、それまで群れていたところから散っちゃうとか。それでなかなか釣れなかった。ヒラノ——ルアー・フィッシングでやるわけ？

ゲン——そう、もっとも巨大なルアー・フィッシングがイトウでしょ。もう片方の雄がキング・サーモン。

ヒラノ——魚はイトウ？

ゲン——うん、フーコとかタイメンとかいう魚なんだけど、和名をイトウっていうの。内陸性のサケマス属で、北海道なんかでもたまに釣れるらしいよ。去年、釧路の湿原で一メートル六センチのが釣れたという記録がある。

ヒラノ——で、釣れたの？

ゲン——やっと二匹釣れた。九十センチぐらいのと七十センチぐらいの。一メートル以上は釣れなかった。

マコト——釣る人もつれてったわけ？

ゲン——そう。

ツノ——ここではその人の名はだしたくない。

ゲン——はっはっは。

マコト——だれ？

ツノ——アマゾンの偉大な釣り人よ。

リッ——「オーパー！」の人ね。

マコト——ああ、なるほど。

ヒラノ——テレビでやるときは、「謎の巨大魚をもとめて」とか、そういうふうになるわけだね。

マコト——ゲンさんは画面にはでてこない人なわけだ。

ゲン——そう、いない人。ナレーションだけ書く人。

リッ——ヒッヒッヒ。

マコト——一か所にとのくらしいわ

け？

ゲン——春夏秋冬の宿营地があって、そこを巡回していくのが基本的なパターンなんだけど、七、八月は草が青くなって家畜が太る時期だから、いい草をもとめて、オトルっていう短期の遊牧をやる。折りたたんだテントと家財道具いっさいを、三頭ぐらいのラクダに積んでね。

ヒラノ——子供もいるんだろ？

ゲン——うん。ただ学校は、親もとをはなれて寄宿舎に行くみたいね。

マコト——じゃあ水上生活者と……

ゲン——おなじ。

リッ——人間は野菜とかは、あんまり食べへんわけ？

ゲン——野菜は食わない。穀物もめったに食わない。栄養源はぜんぶヒツジの肉。内臓までぜんぶを食べれば、そこに草もはいつてるから。

ゲン——で、結局、いちばん面白かったのは、この世界には本当に遊牧社会

というのがあるんだと知ったことだね。自然と人間とのいとなみが農耕社会とは本質的にちがう。草のあるところをもとめて、ヒツジ、ウマ、ウシ、ヤク、ヤギなどの家畜をつれて、しょっちゅう移動している。で、テント生活でしょ？ おれはテントで芝居なんかやっているからさ、そのテントが日常化して

る世界なんだから、そのことにいちばん興奮したみたい。

リッ——どんなテントなの？

ゲン——さっきの「ゲル」っていう、一時間ぐらいで折りたたみできるやつ。柱はないの。てっぺんの木製の輪っかにいっばい穴があいてて、そこに傘の骨みたいに樺をつっこむ。そのあいだをのびちみする木の枠でうめて、キャンパス地のシートをかぶせて、一センチぐらいの厚さのフェルトを内側に

ツノ——ほんとだよ。

ゲン——らしいよ。あとは乳製品——

有名なのがウマの乳を醗酵させた馬乳酒ね。春から夏にかけて肉を食わない時期は、ほとんど馬乳酒と乳製品だけで暮らしてるみたい。調味料もいっさいなし。塩味だけ。

リッ——香料もないの？

ゲン——ない。コショウもめったにない。トンガラシもニンニクもない。テントっていうのは余分なものをもって歩けないから、衣食住すべて、生命を維持できる最少限度のもので暮らしてるのね。娯楽もあんまりない。

リッ——じゃあ、動物がもの食ってる

あいだ、暇やん？

ゲン——暇じゃないよ。だって一人

五〇〇頭も管理しなくちゃならないんだもん。一つの家でヒツジとヤギとウシとヤクとウマを飼っているとすればさ、

それぞれの放牧地がちがうわけ。そう

はるわけ。

マコト——大きさは？

ゲン——直径五メートルぐらい。そこにベッドやストーブや家財道具がおいてある。

マコト——薪ストーブ？

ゲン——森林にちかいとこはね。そうじゃないとこではウシやヤギのフンを燃やしてる。フンっていうのは、ひじょうに火力がつよいんだよ。

ひとつには、あそこはフンの世界なのよ。草原のいたるところに、家畜の

フンがある。だから、「ああ、気持が

いい！」って寝ころぶと、からだ

ンだらけになっちゃう。あとニガヨモ

ギというアブサンをつくる有毒な草が

一面にはえてて、そのハッカにちかい

ような、かるやかな、ほろにがい香り

が草原をつつんでる。家畜のフンとニ

ガヨモギの香り——それが草原の世界

なんだよ。

すると、すくなくとも五人の人間が必

要になるでしょ。とても一つの家族で

は面倒がみきれないから、一つの共同

体のヒツジならヒツジだけをあつめて、

それを一人の人間が管理するというよ

うになる。つまり血縁的なものにはじ

まって、しだいに地縁的なものになっ

ていった集団があって、それが一つの

単位になってるのね。

ツノ——それは社会主義とはあんまり

関係ないの？

ゲン——社会主義になってからは、そ

れをもとにして、だんだん集団のあり

方を変えていったみたいね。

ツノ——コルホーズ的なものに？

ゲン——そう、それを生産の最小単位

にしていったわけ。いまは所有は個人

なんだけど、管理は共同でやるという

過渡的な形態みたいだね。

マコト——ヒツジにはシルシがついて

るの？

ゲン——それはないけど、二〇〇頭いても三〇〇頭いても、見分けるすべがあるんだって。とくに女性や子供の識別能力というのは、ほとんど想像を絶するほどらしいよ。

ツノ——本とかは？

ゲン——すくないんじゃない？ でも動物説話とかの口承文化は無限にあるんだよ。なにしろ文字の歴史がみじかいから。やっとジンギスカンのころでしょ、モンゴルで文字が採用されたのは？

ヒラノ——相撲？

ゲン——ぼくは見なかったけど有名なんでしょ。あと競馬ね。

ツノ——旗をなびかせてな。

ゲン——モンゴルの国旗っていいね。右と左が赤で、まんなかでモンゴリアン・ブルーで、そこに魚とかいろんなかたちが描いてある。

マコト——音楽は？

ゲン——ある。馬頭琴という胡弓みたいな楽器があって、それを使ったオルティンドーっていう歌ね。追分の源流。それとホーミーという、ひとりの声帯でふたつの音を同時にだす歌い方があられるらしいね。

マコト——演劇はないんだろ？ アジアの遊牧民をたどって行って、回教圏になると演劇はパタッとなくなるのね。小泉文夫さんとも話したことがあるんだけど、仮面劇とか即興のかけあいとか、遊牧民にはシアトリカルなもの伝統がない。宗教儀式みたいなものだけで、そこから演劇が分離してないんだね。

ヒラノ——農閑期みたいな暇なときがないんだ。

ゲン——でも忙しい時期を一つにまとめようとはしてるんだよ。たとえばオスのヒッジの腹の下にフンドシみたいな垂れ幕をたらしめて、特定の時期以外

ままだ皮をはぐ。つまり血がぜんぶ肉にまわっているようなかたちで食うようにしてる。

ツノ——モンゴルはゲンさんの体質にあった？

ゲン——むだなものがないということでは、ひじょうに好意をもったね。

リツ——しかし、ヒツジばかり食わされて、まいったのちがうの？

ゲン——最初の一週間ぐらいいは臭いか油が鼻についたけど、そのうち、それしか食うものがないとわかってくると、あんまり不便にも感じなくなるんだよ。大草原のなかでさからってしようがないしさ。

ツノ——ふっふ、ゲンさんらしい。

ゲン——スキップとした感じっていうか、生活とか時間のなかに隙間がいっぱいあって、風がビュービューとおってる感じというのは、そんなに不愉快なものじゃない。とくにテントで芝居をや

ってきた人間としては、好感をもたざるをえないよね。

ツノ——黒いテントはあった？

ゲン——なかった。ただ、町のなかにはったテントを見なれてると、あっちのテントはひじょうに牧歌的に見えるよね。ぼくたちのテントのほうが、はるかに過酷だと思った。

リツ——タイとはえらいちがいがいやな。

タイはものごうまいとこやから。モンゴルとは対照的に、あそこにはあらゆる種類の野菜があって、しかも日本みたいにパイオナメントとかと温室栽培じゃないから、香りがつよい。それがタイの食いのうまい第一の理由なんじゃないかな。

ゲン——でもタイの場合だと、フィリピンとおなじで、都市部と農村とでは生活のしかたにかなりのちがいがあるでしょ？ 遊牧の場合は、それが無いんだね。都市も都市としてだけ発展す

は交尾ができないようにする。そうやって、おなじ時期に子が生まれるようにしてるらしいよ。

ヒラノ——そんなにで大丈夫なのかね。ゲン——ぼくらはヒツジを動物と思ってるけど、モンゴルの人たちはちがうみたいなんだよね。

マコト——穀物とおなじ。

ゲン——おれたちがコメについてうんぬんするじゃないか？ 「これ古米じゃねえか」とか「新米はやっぱりうまい」とかいふだろ？

マコト——「稲穂がみのった」とか？ ゲン——そうそう。だから草とヒツジっていうのは、ほとんどつながってるものなんだね。人間だって、古代には草やヒツジとつながってたのかもしれない。ぼくらだと、ウシやブタを殺すと血をぬくじゃない？ だけどかれらはまず胸を切りひらいて、そこから手を入れて心臓をにぎって殺して、その

るんじゃない、さっきも話したみたいに、都市と草原が地つづきというか、草の海のなかに都市を浮かべておかなくてはならないからさ。

ツノ——都市プロレタリアートなんているの？ 草原の革命っていうのは、どういう革命だったんだろうね。

マコト——やっぱり疾風のように革命が駆けぬけてったという……

ツノ——なんの痕跡ものこさずに……マコト——風の噂に「革命が起きた」ときこえるだけでさ。

ゲン——ジンギスカン帝国の痕跡だって、なんにも残ってないもんね。あんなところから、どうして全ユーラシア大陸を制覇したような人物がでたんだろ？

結局、制覇というものの質がちがうんだろ？。ただダーッと行っちゃう。

そこにとどまって官殿や神社仏閣をつくるなんてことはしない。

マコト——やっぱり風の噂だよ。

ツノ——旗の記憶だよ。

ゲン——なんたって日本の四倍ぐらいの広さがあるって、人口が二〇〇万——東京ぐらいの広さのところに、わずか三〇〇〇頭のヒツジ……

マコト——芝居なんてあるわけない。ゲン——ジープで走ってるとね、草原のまんなか突然、トランクを地面において、お父さんとお母さんと子供がポツンと立ってる。不定期のトラック・バスみたいなのがあって、それを待ってるらしいのね。

マコト——道はあるわけ？

ゲン——草原の道というのはね、農耕地の人工的な道とちがって、とおりのすいとこを車がとおったあとにすぎないわけ。こっちがぬかっっちゃたら、あっちにはみだして、あっちが岩だらけだと、そっちに迂回してというぐあいに道ができる。だから峠から下を見ると、いろんな道が錯綜してるわけだ

よ。ただ全体として、それらの道はどうやらおなじほうに向かっているらしいということがわかる……

マコト——ふっふ。プレヒトの「正しい道」というのは通用しねえな。

ゲン——そうなんだよね。川だって、まっすぐがいいとはかぎらない。生態系を破壊したりして、プレヒトの「理想的な治水」の詩とは正反対の結果をもたらしちゃう。

ひとりのじいさんがね、「夜暗くなったら、運転手はどうやって道を見わけるか？」っていうんだよ。山も星も見えない。そういうときは草を見るんだって。ある季節にはおなじ方向の風が吹くから、それによって草がわずかにまがってる。そのなびき方を見て方向を知ってるいうんだね。

ヒラノ——ゴルフのパターだ。

ゲン——「その草もわかんなかったらどうするか？」とじいさんがいうんで、

ぼくら、いろんなことを答えたわけ。「どれもちがう。そこにテントをはって寝ればいい」だって。もう、まるで間尺にあわない。

ツノ——フィリピンあたりとはえらいちがいか？

ゲン——なんのかんのいっても、あっちとはいろいろ関係があった。

マコト——もとおなじだもんな。

ツノ——さてと、だいたいこんなところかな？

ゲン——釣りの話をしなかったね。

ツノ——あ、そうだ。

ゲン——イトウはなかなかだったけど、バイクやなんか、日本とくらべたら、川や湖の魚影の濃さは、ほとんど想像を絶する。

マコト——だれも釣らないんだらうな、二〇〇万人しかいないんじや。

ゲン——かれらはヒツジを食ってきた人たちだから、魚は基本的には食わな

いわけ。これはラマ教の「地にもぐるものと水にもぐるものは聖なるもの」という教えのせいもあるみたい。清はラマ教をつかってモンゴルを統治したからね。それといっしょにチベットの水葬の習慣がはいつてきたからさ、川にながした死体を魚が食べるというんで、魚を食べたがらない。それから鳥も食わない。

ヒラノ——木がないんじや、鳥もとりようがねえよな。

ゲン——でも、猛禽類はものすごく多いよ。巨大なワシがいる。ただ、ニワトリがいないのね。だから、コケコッコで眼がさめるといこともない。

ツノ——メエメエの声だけか。

ゲン——ぼくらが釣っていると、馬にのったヒツジ飼いの少年がバートンと見に駆けてくるんだよ。「なにやってんだ、こいつら」っていうふうに。それで一時間も二時間も、じっと見てるから、

手ぶり身ぶりで「おまえもやってみるか？」ときくと、「いや、いい」って。

でも、おもしろいらしい。だから、だんだん釣るようになるだろうという感じはあるよ、スポーツ・フィッシングとして。

ツノ——あんまり信じられねえな。

ゲン——川筋にすんでたほんの一部の人は、むかしから魚を釣って食ってたらしいけど、全体としては生活のなかにはいってない。

マコト——魚の説話なんかはないの？

ゲン——あることはある。イトウのことをトルというんだけど、むかしはでかいトルがいたんだって。そいつが川をさかのぼってきて、朝、湖に頭をつっこんだ。夕方、ようやく尾っぽがやってきたというような話とか、二匹のトルが頭と尾っぽをくっつけて湖のなかの島をかこんだとか、そういう大きな魚の伝説がある。

ヒラノ——湖はかれないで、ちゃんといくつもあるわけ？

ゲン——ある。そのほかに雨が降るとできる水たまりとか湿地帯みたいな湖が無数にあるの。ぼくらが行ったのはテルキン・ツァーガンという湖で、そこでバイクを釣った。バイクはほとんど入れ食いだっただね。十メートルぐらいのところにボチャンとやって、そのままひいてくると八十センチぐらいのがかかってくる。

マコト——おもしろくもなんともないじやない？

ヒラノ——いちども釣られた経験がないわけだな。

ゲン——すれてないんだよ。

ツノ——そりゃ平野のヘラブナとはちがうだろう。きみのは、すれた魚と智恵の争いをやるんだから。

ゲン——ヘラブナは何度も釣られたのがいっぱいいるから。

ヒラノ——口なんかはれあがってる。
ゲン——ヒツジが草というのとおなじで、見方によれば、魚ってのは水だからさ。

ツノ——ヒツジは植物、魚は鉱物か。
ゲン——そういう釣りは、水とたわむれ、水とコミュニケーションしてるみたいなものなんだよ。

ヒラノ——そりゃあそうだね。まず水色を見て、濁りがはいってるとかさ。

ゲン——魚のことはあんまりいわないもんね。ルー・フィッシングとか溪流の釣りがアウトドア・ライフや自然保護の問題とむすびついたりするのは、そういうことと関係があるんだね。このごろはアマゾンでさえ、かなり上流にまで行かなければ、巨大な魚は釣れなくなってきたらしい。そのくらい地球全体が開発されちゃった。

ヒラノ——そうするとやっぱりヘラブナだな。

ゲン——はっはっは。ヘラブナは釣っても殺さない。
ヒラノ——殺さないし、どんどん入れるしさ。

ゲン——持って帰って食べる人はすくないでしょ？

ヒラノ——うん。でも成田山の初詣に行くとならばマブナを売ってるけど、むかしはマブナだったのが、いまはヘラブナの稚魚をつかっているらしい。

ゲン——釣りもだんだんそうなるってくるんだらうね。ルーも、がんがんで釣って持って帰ってきちゃうというんじゃないで、キャッチ・アンド・リリースが原則になってきている。それからルーなら、そんなに全滅させないですむということがあるのね。どっかで逃れる魚がいるから。
マコト——うーん、そういう釣りぐらいいしか、真剣なたたかひをする場所がなくなってきたんだな。

ヒラノ——へっへ、そういうなよ。
ゲン——ばくなんかは釣るしかたはどうでもいいけど、まだ釣れるうちは海で釣って、釣った魚はかならず食おうという感じがあるね。川の魚はリリースしたほうがいいと思うけど。

ヒラノ——環境問題とかリリースとかいうことには、おれなんか、あまりこだわってないけどね。いうにいわれぬ釣りの醍醐味よ。それだけ。

ゲン——でも釣りをしていると水に関心をもつようになるでしょ？ 水辺の食性と動物植物の生態にたいする関心が必然的にでてくる。

ヒラノ——水際だね、いちばん問題なのは。それは海だっておなじだよ。釣る人間のエゴからすれば、自然のままにしておいてほしい。

ゲン——そういう考え方とむすびつくと、釣りというののもっとゆたかなものになるんじゃないの？

詩三篇

野うさぎと死 ウィネバゴ説話

野うさぎは死のことをきくと小屋にとんで帰って泣きわめいた
——おじさん、おばさん、死んじやいやだあ
するとこんなおもしろいお話をかかると

——結局みんな死んじやうんだ死ぬんだよ
野うさぎはそのおもしろい話を崖にむかってなげつける
崖はぼろぼろにくずれおちた

野うさぎはそのおもしろい話を岩の上になげすてる
岩はこなごなにくだけちった
野うさぎはそのおもしろい話を土にうずめる

土に住むいきものはびたりととまって、かちかちになった
野うさぎはそのおもしろい話を空たかくなげとばす
鳥がばたりとおちて、もう死んでいた

野うさぎは小屋のなかで毛布にすっかりくるまって泣きながらねた
——みんな死んだら地球があふれちゃう
どこへいったって土地がたりないよ
野うさぎはすみっこで毛布をかぶってじっとうごかない

私たちだけ アリス・ウォーカー

無視すること

金の値打ちを失なわせるのは私たちだけ

相場が上がろうと下がろうと

知ったことではない、と

金の在る所、必ず

ついてまわるのは鎖、だね

おまけにきみの鎖が

金でできているなら

きみには

さらにつごうが悪いだろう

羽根、貝殻

海が形造る石

すべて めずらしいものたち

この世にたくさんあるものも
ほんの僅かしかないものも
等しく愛すること
それが私たちの革命

くぼたのぞみ訳

リズの胸に輝くダイヤモンド アリス・ウォーカー

リズの胸のダイヤモンドは

鉱山へかり出される

朝の

彼の瞳

ほどにも輝いてはいない

ナンシーの宝石箱

にしまい込まれたルビーは

(そう、彼は赤い色が大好き！)

子供たちの

ひそめた眉にうつる
絶望

ほどにも生々しくはない

おお、アフリカの人々よ！

いたるところに見えるのだ

血を流し

泣き叫ぶその姿が

あなたの街に住む

人間のまっ白い首筋で

泣き叫び血を流す姿が

くぼたのぞみ訳

キリコの クツ 玖保キリコ

初めてコーヒを口にしたのは、確か、中学生のときだったと思う。

それ以前は、たとえコーヒを飲みたがっても、

「子供には、コーヒは毒」

と言われて、飲ませてもらえなかったのである。

ときどきは、コーヒ牛乳を買ってもらえることもあったが、買い食いの許されていない子供立場としては、自分の好きなときに、勝手に飲むなどということは、到底、望めなかった。

当時の私にとって、コーヒ牛乳というのは、かなりおいしいものと思われた。

そして、そのコーヒ牛乳よりも、さらに良い香りを放つ本物のコーヒ、豆を挽いて入れたコーヒ、両親がおいしそうに飲んでいるのを横目で見ていたコーヒは、絶対、コーヒ牛乳

よりもおいしいはずであると思われた。コーヒ牛乳は子供用で、本物のコーヒは大人のものだという気がして早く大人になりたいものだ、その頃考えていた。

私があまりにもコーヒを飲みたがるので、「家では絶対飲ませてくれない」と訴え、伯母が母に内緒でインスタントのコーヒを飲ませてくれたことがあった。

しかし、いくら牛乳を足しても、砂糖を入れても、それは、店で売られているコーヒ牛乳ほどおいしいとは思われず、私がかっかりしてしまった。

そして、それはきつと、伯母がくれたコーヒはインスタントだからしかたがないんだ、とますます本物のコーヒに期待をかけるようになった。

あるとき、お中元かお歳暮か忘れたが、家にサイフォンのコーヒセット

がきた。

サイフォンでコーヒーをいれることは、見た目がおもしろいので、それで両親は家でよくコーヒーをいれるようになった。

そのせいかわからないが、私自分もコーヒーを飲みたいと主張すると、両親は、

「もう中学生だからいいだろう」と割合あっさり許可してくれた。

そうして、期待に胸はずませて飲んだ本物のコーヒーは、中学生の私にはやはりコーヒー牛乳ほどおいしいとは思えなかった。

それでも、コーヒーをいれるときの良い香りと、サイフォンのもの珍しさに魅かれて、それから両親と一緒に飲んでコーヒーを飲むようになった。

そのうちに、サイフォンよりもドリッパーで入れたコーヒーの方がおいしいと両親が言い出して、サイフォンがド

リップに代わり、台所にコーヒー・ミルが加わった。

そして、私が両親のコーヒーをいれるようになって、コーヒーを飲むことが習慣になった。

今は、両親は家でほとんどコーヒーを飲まない。

日曜日の朝、飲むぐらいいだ。私はあい変わらず、毎日毎日、コーヒーを飲んでい

仕事の打ち合わせをするとき頼むのは、ほとんどコーヒードし、家で仕事をするときもコーヒード。

仕事を始める前は、必ずコーヒードを3〜4杯作ってから、部屋に行く。

コーヒードをいれてから仕事をしないと何だか落ち着かないのだ。

コーヒードをいれないで仕事に入ると途中で不安な気持ちになってきて、すぐ下へコーヒードを作りに行ってしまう。

(私の部屋は2階である)

そんなにコーヒードが好きなのか、というところ、そうでもない気がする。

もちろん、コーヒードは好きだが、紅茶だって、緑茶だって好きだ。

しかし、仕事をするときには、コーヒードでないがダメだ。

非常に暑いときとか、熱っぽいときや乾燥したときは、ポカリスエットやアクエリアス等のアイソトニック・ドリンクを飲んだりするが、それはあくまでもコーヒードとの併用であって、それらがコーヒードの位置にくることはない。

コーヒードは常に手元にある。気分を変えようと、紅茶をいれてから仕事に入るときもある。

しかし、そのうち紅茶ではやはり物足りないような気がして、コーヒード作りに行ってしまう。

そして、初めからコーヒードにすべき心細いかもしれない。

だったと後悔するのだ。

それほどコーヒードが飲みたくなくても、コーヒードをいれなければならぬ。

たとえ、そのときコーヒードが欲しくなくても、違うものをいれた後に必ず欲しくなるのだ。

コーヒード中毒じゃないか、と言われるが、本当に飲みたくないときは、コーヒードをいれてもそのまま飲まずに置いておくので、そうでもない気もする。飲まなくても、コーヒードが入ったカップが手元にあって、いつでも飲める状態にあればいいのだ。

もしくは、コーヒードをいれば気が済むのだ。

飲まなくても、いれれば気が済むというのは、決してコーヒード中毒とは言えないはずだ。

旅行等に行ったりして、コーヒードが飲めない状態にあっても、結構平気で過ごせるし。

ただ、家にいるとどうしても飲まずにはいられない。

仕事でなくても、コーヒードをいれたくなる。

最近、もしかしたらこれは一種の逃避なのかもしれない、と思うようになってきた。

仕事を始める前にいれるコーヒードは少しでも仕事を始める時間を遅くしようという逃避であり、仕事にいれるコーヒードは、当然、仕事そのものから離れたという逃避であり、仕事をしているとき以外にいれるコーヒードは、暇をもて余していることからの逃避なのだ。(私は貧乏症なので、ひまであることに後ろめたさを感じる)

そして、隠れ込もうとする場所が、きつとコーヒードなのだ。

あの強い香りと味でなければ安心できないのだ。

紅茶や緑茶では、身を隠すには多少

心細いかもしれない。

今は、私は異国の空の下にいて、コーヒードが自由に飲めない状態にある。

コーヒードを飲むには、レストランかカフェに行かねばならず、すでにそれらは閉まっている。

スキあらば、コーヒードを飲もうと、そのチャンスをつうかがっているのだがなかなかそれが難しい。(時計は夜の12時をまわっている)

だから、どんなにおなかがいっぱいでこれ以上何も入らないと思っても、レストランでの食事の後には必ずコーヒードを飲むことにしている。

それでも今日は2度しか飲めなかった。

だから私は今、無性にコーヒードが飲みたい。逃避ではなく、本当に飲みたいのだ。(デュッセルドルフにて)

おたより ひらのちゅう



うごく日本語
志沢小夜子

ネエ、山中先生ってね、いつまでたっても大きくなれないみたいよ。

——どうして？

だってね、このまえもさくら組さんの先生で、また今年もさくら組さんなの。さくら組さんはみーんな卒業して一年生になっちゃったのに山中先生はまたさくら組になっちゃったの。いつまでもいつまでもさくら組じゃ、ずっと、ずっと大きくなれないよねえ！

(5才・女)

ネエ、お母さんは、おばあちゃんの子どもだよ。

——そうよ、おばあちゃんから生まれたの。

じゃあ、子どもだったの？

——そうだよ。

(5才・女)

なんだようし、人間だよー、人間てなんだよー(とほえる6才・男)

(はじめて大仏をみて)

あっ、ボウシかぶってるうー！

(2才・女)

(テレビに毛のない人が出た)

ああいう人って赤ちゃんるとき、何才だったの？

(3才・男)

(おなかのいたい同じ年の女の子に) 赤ちゃんが生まれるんじゃないの？

(2才・女)

大きくなって赤ちゃん生まない！

あたしみたいにかわいくないもん。

(3才・女)

お空さんたら、がまんできないからって、こんなにいっぱいおしっこするみたいに雨をふらせちゃってさ、もうすこしがまんすればいいのに。

(5才・女)

(昼間の月をみて)

あれ、なあに？

——月よ。

だって、まだ夜じゃないでしょ。ばかだねえ、きつとまちがえたんだね。はずかしいから白い色してるんだよ。

(3才・男)

* 夜がこわれると朝になるの？

(4才・男)

* (テレビで「おれはヤクザだ」をみて) おまえ、人間じゃないよ。

あたりまえだ、おれはヤマサだ。

(4才・男)

* (愛と勇氣の猫の物語のCFをみて)

あいってね、つよいんだよ。だってさくまをひっかいちゃうんだからね。あいてね、ねこなんだよ。くまはゆうきっていうの。

(3才・女)

* お母さん、あたしオカッパっていうことばの意味知らないときは、頭のまんなかがはげている人のことをオカッパっていうのかと思ってた。

(6才・女)

ねえ、おひめさまあそびしましょ！
ばく、おとこだだからしないよ。
じゃあ、おとこあそびしましょ。

(4才・女男)

* —このあいだ、山菜ハイキングに行ったでしょ。

おもしろかったネ。こんど、よんさいハイキングにはいついくの？

(4才・女)

子どものことは面白いと思ったのは、子育ての最中で、その時は面白いと記録してただけだった。

その生きている日本語を活字で生き返らせるという困難な仕事を始めようと思いついたのは、二番目の子が小学校に行き出したら、さっぱり面白くなくなってきたからだった。

2才から9才くらいまでの子どもの

はねて、とんでいることばを、いま一年がかりで、全国の母親や父親、保母さんたちを集めて記録してもらっている。

編集に入れば、ことばはもっと生きる工夫がされるけど、とりあえず、水牛の読者のみなさんに読んでもらいたいと思って……。

それから、これを見て、子どもたちは大きくなっちゃったけど、うちにも記録があるとか、自分の子の記録をとりたいとか、こちらにとって大歓迎の人がおりましたら、是非ご一報ください、待っております。

この子どもことばの本は、順調に進めば、来年の春、晶文社から出版の予定。

連絡先・練馬区早宮2・6・6

電話03・991・3139

(夜のみ)

水牛かたより 情報

●三宅様名 レクチャー&コンサート
10月から12月まで月に一回ずつ、計三回。テーマは次のとおり。

10月17日(金) 6時半〜8時半、青山こどもの城スタジオ。(楽譜の解法(アナリーゼ)の実際) — 分析のヴァリエイション、構造の風景。実際の演奏をおして。

11月14日(金) 6時半〜8時半、青山こどもの城スタジオ。(即興演奏の内的メカニズムの解明) — 即興はどこからやってくるのか。ゲスト 佐藤允彦(ピアノ/シンセ)

12月9日(火) 6時半〜8時半、新宿モーツァルト・サロン。(C・アイ

ヴスの現在) — ソング集、ヴァイオリン・ソナタ等。ゲスト 数住岸子、田月仙。

受講料三回通し 九千五百円。一回券 三千三百円。電話予約は池袋コミュニティ・カレッジ。電話981・0111。(三宅)

●ジョン・ゾーン デュオ+「ラグビー」。新宿ピットイン電話354・2024。9月23日(火) 7時半。三千円。演奏はゾーンと佐藤通弘(三味線)、山本秀夫(ドラムス)、三宅様名(ピアノ)。(三宅)

●「街角のバラード」田川律と仲間たち。本誌では「料理人」としか思われてなかったり、そのせいで本誌が、「料理の本」だと誤解される元を生みだしている。たまに別のこと、というわけでもないが、生地大阪の、それも

まさに生地の前の大阪城音楽堂で、60年代関西フォークの友だちを集めてコンサートをひらく。黒テントの斉藤晴彦もかけつけてくれる。

9月28日(日) 1時。二五〇〇円。問い合わせ・サンケイ新聞事業部電話06・343・1221 (田川)

●「女刑事の死」早川書房。一四〇〇円。藤本和子さんの久しぶりの翻訳、それも初のミステリー、実力派のロス・トーマスの新作。原題BRIARPATCHは、その和子さんが訳したトニ・モリスンの「誘惑者たちの島」にも関係のある黒人の古い民話からとられている「ひとそれぞれの安全地帯」ともいうべき「茨のやぶ」のこと。これを頭に入れて読むと、登場人物たちの虚々実々の駆け引きがおもしろい。随所に「藤本語」が挿しめ、藤本ファンにはこたえられない。(田川)

料理がすべて 田川律

夏休み——いつもは温度計が二十三度を越えると、思考能力がゼロになるので、夏休み、と勝手にきめて、うちでごろごろしているのだが、今年はそうもいかなかった。ジョゼフ・ハンセンのブランドステッター・シリーズ第6作「墓掘人」のほん訳をしていたためとうとうクーラーというものまで買ってしまつて、毎日勤勉に働いた。そうすると、いよいよ夏休みの感覚がなくなつてしまつて、あれよあれよという

間に八月もすぎて行く。

間にも八月もすぎて行く。ゴキブリの異常発生——「ゴキブリのいないうちなんか、あまりにも非人間的すぎる」なんていつているうちに、突如大量に発生した。さすがにたまりかねて、同居人の大谷くんと、「ゴキブリホイホイ」や「アースレッド」らしきものを買つてきて、退治しようとしたら、いるわいるわ。約二週間ほどで、千匹（！）近くも捕獲したのだがまだいるようだ。不潔なのか。男ヤモメにウジが湧く、というヤツかな。それにしても、はじめのうちは面白がつて追いかけてゴキブリを捕えていた猫たちが、今ではすっかり馴れたのか、共棲同盟を作つたのか、いっしょにキヤツツ・フードを食べている。マイッタナア。

ワインド・サーフィンと白身魚の甘酢

た。そこへ行く前日、泊めてもらつたもうひとりの医者、中村くんのところでひと晩料理を作つた。タイの料理でおいしい魚の甘酢アンかけ。ただし、千里中央のピーコックに、この日バクチイがなかったで、なんと、あまりイメージもなくつるむらさきを使った。魚は、甘鯛だった。これを素焼きにしておく。塩をしないで焼くだけ、というのがいい。ウロコ落しからやつたがこれがまあ派手に飛び交い、そういえばこの頃、自分のうちで魚のウロコをとることも少くなつた、と改めて思った。「甘酢アン」の方は、ニンニクを刻んでいため、玉ネギを大らかに切つて加え、酢、サトウ、塩、それに赤唐辛子（ただし、このうちにはひとりだけ辛いのに弱い人がいたので控え目にした）、酒をテキトウに加えて味付けし、ぎっくり切つたつるむらさきをた

して、片栗粉でトロ味をつける。これを先の素焼きの魚の上にたっぷりかけて出来上り。魚はカラ揚げにする場合もあるが、こちら今回はさっぱりした味。そういうえば、ジャマイカのメイン料理はこのスタイルで、サトウと片栗粉を使わないだけ。いや酢も入れないか。ほんならえらい違いやて。だが、素材と料理のでき上りが似ているのでふと思ひ出してしまう。

同時に作つたのは、いつものレパトリ、アサリのワイン蒸しと変り冷奴。変り冷奴の方は、今回は伝授してくれた藤本和子さんの忠告をうけて、ちゃんとザーサイも細かく刻んで加えた。なるほど、こっちがずつといい。豆腐はピーコックの中でも一番固い木綿豆腐を使った。京都製だつたみたい。

ソバと落語——野田阪神のガード下のソバ屋の二階で毎月一回、ソバを食

アンかけ——今年もこりずに、志摩半島の一角、五カ所湾へ出かけていつてワインド・サーフィンに挑戦した。今年は去年に比べて、水がきれいだった。ハマチ養殖のためのエサのくずがあまり浮かんでいなかった。そのかわり、今度はカキの殻が密集した地帯へ流されて、見事に掌と脚を派手に切つた。同行したのが、大学の同期の医者たちなので、と思つて安心したら大間違ひ。そもそもワインド・サーフィンへ引きずり込んだ方の角辻くんは、きわめて冷たい。「塩水で消毒した方が早く治る」からはじまり「男はケガをした方がいい。アドレナリンの分泌は活発になるし、白血球はふえるし」と、引退しようとしたのを許してもらえず、血まみれのまま、は大ゲサだが、ワインド・サーフィンと、ヨット・レースをやらされてしまった。おかげで、ともかく風下へはすこし走れるようになって

せる落語のライブ（？）があるというのに、今回はうまくスケジュールが合つて出かけた。ソバ屋の二階へ四十人ほどの客が集り、若手が四人ぐらい落語をやつて、そのあと、下でオクラソバを食べた。いや、落語も、そういうとこで聞くのは、なかなか面白い。音楽ではいつもそれに近いところへ出かけたが、自分たちもそんなものを企画しているだけに親近感もひとしお。落語をやる人がはじまる前には下足番をし、終つてからは、ソバ湯を配つてたり、これは要するに水牛楽団とオンナくくりくりした笑福亭鶴三がやつた「遊山船」がオモロカッタ。特にはじまつて早々、客席のタバコの煙にむせて、咳しすぎて、また、はじめからやり直したりするあたり、いかにも「納涼気分」満喫だった。ふだん音楽と縁遠い人も、ぼくらのようなライブにきたら

こんな風に楽しむのだろうと、推測してしまった。東京でも、こんなところあるのかな。

そういうえば、大阪生れ、大阪育ちで「ぬるぬるしたものはキライ。いちちに納豆、ににオクラ」といつている中村くんがさえ、このオクラソバはおいしそうに食べていた。ま、納豆ソバと似てるけど、たしかにこのソバはうまかった。そば屋の名前は「やまがそば」だった。

ウナギの蒲焼——子供の頃は、よくウナギを釣った。長い太い糸のあちこちに一メートルぐらいのテグスをつけ、そこに大きめの針をつけ、それに「畠ミミズ」と呼んでいた玉虫色にひかる太いミミズをつけ、川の瀬のあたりに一面に糸を張るようになっておくと、夜中にウナギがかかっているという寸法。とってきたウナギは、いちおうちゃん

と開いて焼いたが、蒲焼にしたかどうかわ解はない。関西と関東ではこの蒲焼の仕方が違って、関西はそのまます焼く。その分が柔らかい。ウナギが好きなのは、たいてい好みがちかにかにわかれる。ウドンの汁の色みいたいなものだ。関西は薄く、関東は濃い。ウドンはぼくは今も関西風でないというが、ウナギの方は関東の方が好きである。たまたま、今月、東京で一回、伊勢で一回、ウナギを食べる機会があったので、改めてこの違いをはっきり感じた。

ミキサーと電子レンジで作る大福餅——これは自分が作ったのではないので自信をもってオススメするわけにはいかないのだが。お馴染みの川崎生活クラブ生協のメンバーのひとりに、結構大胆な人がいて、その人の話。モチ米

一、水二、の割合でミキサーにかけ、充分攪拌。これを電子レンジに入れて蒸す(?)。するとすぐにドロドロになるので、出してきて少しかき回し、さますと、大福餅のコロモ(?)のようなものができるという。それでアノコを包めば大福餅。ま、餅を作るのと原理的にはかわらんワケやし。もっとも本人の話だと、やっぱり「ついでない」から、少しヘンだという。うちにはミキサーも電子レンジもあれへんから実験してみるわけにはいかないのだが——。

やあこ——大阪弁では赤ん坊のことをこう呼ぶ。最近試写会で「赤ちゃんに乾杯」というのを見た。タイトルがグサイ、という気がしたが、男三人の共同生活のところへ、赤ちゃんが預けられて、テンヤワンヤする、という映画だというし、フランス映画や、という

ので見に行った。なるほど、なかなか面白かった。こちら男二人の共同生活だし、映画の中の三人のうちの二人が、イラストレイターと広告代理店勤務という設定が、どこか共通するところがあって、それも面白かった。もっとも「面白い」なんて書くと、待ってましたとばかり、友だちの誰かが、ある日突然「やあこ、あずかってくれへん」といつてきそうなオソロシイ予感がするので、なるべく、そんなこといわんとこ、と思ったりして。

なによりも、ぼくらの共同生活と違うのは、ともかく三人が、口角泡を飛ばすようにギロンすることだ、というより、ギロン以前に、互いにズケズケいうことだ。これはべつだん、この映画に限らず、要するにフランス人にするアメリカ人にしろ、日本人にくらべたら、物の言い方がキツイみたい。それでも、いうだけいうたら、根に持た

ないで、サッパリするのはないか。日本人同士だと、あれだけいうたら、たいてい、どっちかが出て行くことになるか、当分「チミタイ風」が吹くのとちゃうかな。

その次。やあこが来た日に、広告代理店の男は、会社へ電話して「都合悪いから、いついつ迄休み」という。日本の会社勤めの男は、まずこういうことはせんやろな。もっとも、近頃は新聞記者でも、夏休みや、とってはたっぷり休みとって、私の方を大切にしてみたいから、案外こんな事態になったらそうするかな。友人のイラストレイター、沢田としきくんなどは、双児が生まれたので、もっぱら育児に忙しい。事務所(といってもひとりやっつてるも同然)へ電話すると、同じ部屋にいる仲間が「今日は子供の面倒見てから出てくるいうてたから、遅いと違いますか」とかいいう。

そういうえば、悠治さんは、ハヤが小さい頃、コンサート会場へ連れて行って、ハヤがステージへちよろちよろ登場してたりした。今はもう「野球少年」という感じになってしまったが、ハヤはその頃のことを覚えてんかな。

たいていのことを書くのに、ぼくはなんらかの体験があるが、こと、やあこ、に関する限りは、体験がない。だから、五カ所湾のツアーでも、中村くんや角辻くんの子供たちが、六人もいて、みんなもちろんもはや、やあこではないけれど、かれらに対して「親」のようにではなく「友だち」のようにしか接することができない。それはええことかもしれない。いや、だいたいええも悪いも、それしかしやあないねんからな。でも、海ちゃんみたいにな、家にいる時は「死体」という感じでもないな。どこにいてもいつもいっしょ、というのが一番近い。

走る・その八

八月のすがすがしい朝六時。イリノイ州シャンペーン市。一九八二年、ぼくが日本語および日本文学の教師としてイリノイ大学に雇われて以来、われわれは人口六万五千人のこの田舎町を本拠地としてきた。

真っ赤な猖狂紅冠鳥がさえずりながら、木から木へ飛ぶ。電線を伝わって走る栗鼠が、キャッキャッとぼくを叱るように啼いてゆく。地面をせわしくいったりきたりの蟻たちも、ゆっくり脚の筋肉を伸ばしているぼくをせかせかせる。

ストップウォッチを押して、ぼくは家の前のウイリス通りに出て、駆け出す。青々と茂った木々はトンネルのように道を覆っている。楡、楓、白樺、銀杏、ねむの木などは、昇る朝日をさ

えぎって、すずしい影を歩道に落とす。ぼくはウイリス通りをカントリークラブのゴルフ場まで行って、それからゴルフ場の周りを走って、高級住宅街を通って帰ってくる。約八キロのコースだ。車の少ない、人影もまばらな道程である。

しかし、なんでぼくはここを走っているのだろうか。それを考えるだけで、腰が抜けそうになることがある。

*

ぼくたちを日本から運んだ航空機はシカゴのオヘア空港に着陸した。税関を通った時、検査官に聞かれた。

「どこにいましたか？」

「日本です」

「旅行の目的は？」

「研究です」

「ケンキュウ？」

「日本文学の研究です。わたしはイリノイ大学で日本語と日本文学を教え

ています。一年間大学を休んで、日本で研究生活をしていました」とぼくは几帳面に答えた。

「日本語を？ あんたが？」日系人の検査官は、青白いぼくの疲れた顔を見て首をかしげた。「わしも一年ぐらい日本語を習ってみたが、わけわかんなかったな。あんた、ほんとに教えてんのかね」

「同感です」とぼくはいいたかった。このごろ日本語を教えるという仕事に對して、疑問と焦燥を感じているからだ。去年の十二月二日、「日本語を世界に広げるために」という「朝日新聞」の社説を読んで以来、かなり不機嫌になっている。曰く「言語は国力の象徴である・・・言葉は品物ではない。民族の心、文化の結晶なのだ。だから日本語教師は、単語や文法を仕込む職人であると同時に日本を知らせる伝道者、教育家という役割を担っている」

日本の国力の象徴として、日本語を世界に広げているのか、ぼくは？ 日

本文化の「伝道者」なのか？ おい、待てよ。日本人が、大日本帝国の国力の象徴として日本語を朝鮮や台湾に伝道したのはそれほど久しいことではない。が、「朝日新聞」の論説員にしてみれば、あれは日本語教育の模範であった、ということになるらしい。

最近、中曽根総理と梅原猛をはじめとする学者グループが「日本文化のアイデンティティーの確立」を目的とする「国際日本文化センター」の設立を企てているという。政府または学者の集団が一国の文化のアイデンティティーを確立しようというのは、はなはだ傲慢な話だとぼくは思うが、少なくともそれは「国力の象徴としての日本語」「伝道者としての教師」という発想とは一貫している。伝道者は、伝えるべき、はっきりと確立された道、つま

りドグマがなければ困るからだ。悪夢のような話だが、国際日本文化センターという中央機関によって確立された日本のアイデンティティーをぼくが「伝道」する、ということが期待される日はそう遠くはないのかもしれない。

私観だが、文化ないしはアイデンティティーというのは政治権力や学者によって指定されるのではなく、人間自身の行動と思想から派生するものであり、変遷するものだ。アイデンティティーは真空状態で確立されるのではなく、人々の関係、歴史の移り行きの中で成立する。日本語とはこういうものだ、日本人のアイデンティティーはいにしえより変わらざるものなり、と断言する者は、自らの世界を自らの手で形成する人間の可能性を矮小化するのだ、とぼくは思う。

*

「あたし、ウェストビュー小学校に

行きたくない」泣きながらヤエルは日本語でそういった。

「どうして？」

「だって星野先生の学校のほうがいいもん。神宮前小学校がいいもん！」困ったな、とぼくは思った。ヤエルもカイも、根こそぎにされたという気持ちになっっているにちがいない。日本で過ごした一年間、日本の社会に溶けこもうとした努力が全部無駄だったと、幼心でそう恐れているにちがいない。アメリカに帰っても、日本で暮らした経験は、お前たちの人生の有機的な一部だよ、お父さんはけっしてそれをお前たちから奪いはしないからね、となんらかの方法で子供たちに伝えなければならぬ。

だが、どうすればいい？ ほっておけば、日本語を完全に忘れてしまおうし・・・(つづく)

編集後記

「おたより」を送ってくれたひらのさくらさんは、平野さんの家の未っ子でことし四歳です。桜の花の咲くころにこの世に登場したので、さくら、というすてきな名前なのです。グッドマンさんちのヤエルちゃんが、さくらちゃんを「さくらんぼ」と呼んでいるのもなかなかすてきでした。
さくらちゃんのお母さんのきみこさんは、自宅で「ひらの」というお店(?)をひらいています。自宅内店舗ですね。この「ひらの」の歴史と、さくらちゃんの歴史はほぼ重なっていて、生まれながらにお客の相手をしていた感があります。ちいさなころはきみこさんの背中にくくられて。最近では試着していると、似合うよ、なんて言ってくれ

ます。お母さんといっしょにお店をしているという自覚があることがわかります。「ひらの」では、きみこさんが自分で染めた糸や手編みのセーター、木綿の服、それにくるみの石けんなんかを売っていて、この秋から週に三日木・金・土と開店しています。さくらちゃんは保育園に通っているので、家にいる確率が高いのは土曜日だと思えます。場所は世田谷区成城4・12・25 寓482・4539 さくらちゃん、きみこさん、それに彼女たちのつくったものに、ぜひ会いに行ってみてください。
この夏、山元清多さんはモンゴルへ、鎌田さんは中国へ、コリクツのキリコはヨーロッパへ、田川さんはタイへ、とそれぞれ出かけました。アメリカへ帰った一家もありました。東京でじっとしていても、世界はもはやきのうの世界ではないという感じ。(八巻)

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。
*本誌は次の書店にあります。

模索舎(新宿) ☎三五二一三五五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三〇一七八九七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三四九六一
ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一一八三〇二
アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三三八〇

水牛通信 第八巻第九号 一九八六年
九月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎二九五
東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座
東京四一九一七九二 印刷所 柳トライ
プリントショップ